

日本IT書紀

055 敵産なれど

04 含牙篇
卷之七 乾坤

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第五十五

敵産なれど

一

計算機の軍需利用を物語るのは、その年の春、陸軍から日本ワットソン統計会計機械に大量の発注があつたことである。日本IBMの資料では「数十セット」となつてゐるが、日本ワットソン統計会計機械に勤めていた北川宗助の証言によると

「八十セットだった」

という。当時の国内で稼働していたパンチカード式統計会計機械装置の総台数に匹敵する。

この発注は折からのアメリカ政府による輸出規制で実現しなかつた。仮に実現していれば以後の戦争の展開は少し違つていたかもしれない。

陸軍が八十セットもの「IBM405」を発注したのは、山下奉文の独断だつたといわれている。

彼は意外にも欧州の事情に詳しくかつた。

若いころ、彼は皇道派——二・二六事件を起こした青年

将校たちの一派——に属していた。そのために、軍部中枢から疎んじられた。

——そういう危険なやつを日本の国内においておくわけにはいかん。

ということ、ドイツやオーストリアなどの日本大使館に武官として派遣された。

体裁はいいが、実態は左遷である。

米英との戦争不可避の気運が高まつた一九四〇年、山下は航空総監に就任し、ドイツ視察団の団長としてメッサーシュミット社を見学した。この会社は流線型の高速戦闘機「Bf109E」あるいは、世界で初めて実用レベルのジェット機「Me262」を開発したことで知られる。ここが電動パンチ装置とIBM405統計会計機械装置を活用して、航空機の生産能率を高めていた。

このころ、軍用航空機には高出力のエンジンの搭載が強く求められていた。出力が大きくなるとより多くの燃料を消費することになるのだが、短時間で高高度に上昇すれば同じ量の燃料で飛行時間もしくは航続距離を伸ばすことができる。

具体的には、高度六千メートルが一つの目安とされた。

高度が六千メートルに達すると、空気抵抗が急激に低減し、省燃料化が可能になる。また急上昇速度を上げれば敵

機より早く、より高い位置に達することができ、高出力エンジンの搭載で機体の重量が増すのだが、降下速度が速くなる。

当初は艦船の真上から真つ直ぐ爆弾を落とす作戦が想定され、「重戦闘機」という言葉が生まれた。その流れの中から、「一撃離脱」という戦法が編み出された。上段から全体を俯瞰し、狙い定めた敵機に急降下しつつ銃撃するのである。

結果として機体は鋸金属製となり、引込脚、開閉式キャノピーが主流になった。航空母艦に艦載するため折りたたみ翼が採用され、航続距離を伸ばすための増槽や高高度の酸素濃度に対応する酸素マスクが必要になった。設計は精緻になり、使用する部材の点数が増えた。

日本軍は部材や部品、器具などの管理を人手で行ったが、ドイツ人は合理的に考へた。

——機械的に管理すれば、流れ作業で機体を組み立てることができないではないか。

この新しい方式に山下は強く刺激された。

ドイツ視察を通じて山下は、

——これからの戦争は航空機の性能と数が勝敗を決める。攻撃するにも守るにも技術と生産力がある。

ということを強く認識した。

また山下はリーダーと暗号の重要性にも気がついていた。ヒトラーは極東の島からやってきた同盟国の陸軍幹部を歓迎して、

——見たいものがあつたら言ってくれ。東洋の友人にドイツは隠すようなことはしない。

と告げた。

それによつて山下は電波を使つて航空機や艦船の位置を検出する装置、複雑な暗号を生成する専用の装置を見聞し、また敵の暗号を解読する技術を提供してくれるよう依頼した。情報戦が作戦の基盤となることを、山下は理解した。

そこで山下はドイツから帰国するとすぐ、首相・東条英機に強大な兵器より技術開発と生産力の強化を申し入れた。併せて独断でワットソンの計算機を発注したわけだった。

二

一般論として、日本の海軍は開明的だったが、陸軍は保守的だった、といわれる。

海軍は兵制をイギリスに学び、欧米の日本大使館に武官を派遣していた。その関係から先進的な機器や技術に敏感だった。それに対し陸軍はプロシア式兵制で歩兵部隊による白兵戦と精神論を重視し、戦車や野戦砲など機械化戦法

を軽視していた、という。

この通説はおおよそにおいて正しいが、一部については異論がある。というのは、まず海の戦いというのは戦場を自在に選択することができ、会敵すれば一撃して退く。

個々の艦船が独立した指揮命令系統を持つ組織で構成され、戦場における集散離合は各艦の指揮官によつて判断が下される。

また艦船は戦場にあつては装備・搭載した武器・弾薬のほか追加補給を受けることがない。最新鋭の機器や兵器、技術に敏感にならざるを得なかつた。

対して陸軍は、万を単位とする歩兵の集団的・組織的な戦闘を前提にものごとを考える。他の戦線から手薄な前線に部隊を回し、基本的には英雄的な突出を許さず敵に圧力をかけつつ長い時間をかけて陣地を確保する。それに広大な中国大陸で最も最初に航空機戦力を活用したのは陸軍ではなかつたか。

——勝敗を求める遊戯に喩えれば、海軍は将棋、陸軍は囲碁というわけである。

軍の戦い方、それは戦略思想と言い換えてもいいが、その違いを理解しなければならぬ、という。それは分かるが、世界の趨勢から見れば、日本の海軍も陸軍も似たり寄つたりだつた。

開明的とされる海軍は航空機を重視した。しかし超弩級戦艦「大和」「武蔵」に代表される大艦巨砲主義から脱することができなかつた。かつ、戦法は日清、日露戦争の艦隊決戦を継承していた。

なるほど艦船の建造を受注した三菱造船、航空機を受注した立川飛行機などは部材管理にパンチカード式統計会計機械装置を使い、軍艦の内部では弾丸を発射する角度や初速の割り出しに電気式計算器が使われた。だが、もつと根本的な課題である物資の調達と最適配備にかかわるシステムは最後まで構築されなかつた。

陸軍にいたつては、戦地で食糧を調達せよという、時代錯誤も甚だしい指令がまかり通つた。食糧ばかりでなく武器、弾薬すら敵から奪つて戦えというのは、チンギスハン以来の無謀な命令だつた。

日本軍が計算機の重要性に気がつくのは、抜き打ち的に真珠湾を攻撃して広大な太平洋と東南アジアに兵力が拡散したときである。物資を運ぶ船舶の手配が混乱した。この戦場に何をいかほど送ればいいのか、送つた物資が間違ひなく現地に荷揚げされたか、誰にも分からなかつた。

分厚い毛布がサイゴンの司令部に届いたり、万余の陸戦兵の手許に飛行機の部品が手渡されたりした。さらに大量の武器弾薬が港湾の倉庫に滞留した。近代戦争を仕掛けた

のに、事務処理は前近代的な仕組み——十露盤と人海戦術——で行われた。

実際、主要な物資積出港には、近隣の学校から十露盤自慢の女学生が五十人から百人の規模で集められ、毎日、パチパチと珠をはじく勤労奉仕部隊が編成されていた。

「会計機械があるではないか」

内閣の企画院は言った。

ところがどう逆立ちしても、軍や関係機関が保有している計算機は絶対数が少なかった。

大本営のうろたえぶりを見たら、山下奉文は

「だからオレは、八十台を注文したのだ」

と、ふんぞり返って自慢したのである。

いたし方なく陸軍参謀本部は、日本生命が保有するパンチカード・システムの軍需への転用を強く要請——つまり命令——して、暗号の解読などを行った。日本生命には海軍省からも「強い要請」があつて、艦船配置計画の策定などを行っている。そうした要請は第一生命、帝国生命、安田生命、松坂屋などにも行われていた。

海軍からも強制使用の指達があり、随時仕事を持ち込まれ、海軍士官二名の厳重な監督のもと、統計課員がすべてその作業に当たらなければならなかった。

こう記すのは帝国生命である。

日本ワットソンの資産を継承した日本統計機は、軍需産業からの要請にも応じなければならなかった。しかし新規の輸入は不可能だったため、生命保険業などを中心とする「平和産業」で使用しているマシンを斡旋した。

このとき東京芝浦電気から派遣された社員の中に、稲垣早苗がいた。戦後、日本IBMの第四代社長となる人物である。

三

一九四一年十二月八日、日米開戦直後（十二月二十三日）に「敵産管理法」が公布、即日施行されると、日本ワットソン統計会計機械の全資産が凍結された。そればかりでなく、経営の実質を担っていた水品浩、安藤馨の両名がスパイ容疑で横浜警察署に逮捕・拘束されてしまった。同社の事業活動は事実上、このときに停止した。

大蔵省は翌四二年一月、拘留中の水品に

「資産の管理人は誰が適任か」

と意見を求めている。

これに対して水品は、森村商事の取締役であつて、元モ

リムラ・ブラザーズ・カンパニーでニューヨーク副支配人としてパンチカード式計算機の輸入業務にかかわった中山武夫を推した。しかし中山は高齢を理由に辞退し、後任の地主延之助が管理人に指名された。

地主は一年をかけて日本ワットソン所有の自動車や不動産などを処分したのち、一九四一年十二月末現在における貸借対照表を作成した。それによると同社の総資産は二百四十八万七千七百八十七円四十六銭となっている。

日本ワットソンを「敵性企業」として解散させたにもかかわらず、戦線が太平洋全域に拡大したことから、日本軍中枢はこれまで以上に統計会計機械装置の重要性を認識した。また既存のユーザーは、継続的な保守サービスを強く求めていた。

こうしたことから地主は渋澤敬三や大口ユーザーである第一生命などと相談し、保守サービスの専門会社を設立することで合意を見た。中心となるのは精密電気機械に通じている会社がいいということで、東京芝浦電気が選ばれた。一九四三年六月一日、「日本統計機械株式会社」が発足した。

「資本金は二百万円で、五五％を東京芝浦電気が出資し、同社副社長の清水与七郎が社長に就任した。このほか、西岡俊雄、矢野一郎、弘世現、渋澤智雄、森村義行が役員に

名を連ねた。矢野は第一生命、弘世は日本生命、渋沢は渋沢倉庫、森村は森村商事、つまりCTR社時代から深い因縁を持つ民間のIBMユーザーを代表した人選である。

日本ワットソン統計会計機械から日本統計機に移籍して営業部長を務めることになった矢向音久の述懐によると、発足に際して矢野一郎は、

「われわれ企業家としてはIBMの事業を残しておくことが業務と思う」と述べたという。

彼は純粹にユーザーの立場から、IBM統計会計機械装置の温存を願ったと考えていい。ただ、実質的な経営の主体となった東京芝浦電気は、新しいビジネスチャンスとしてとらえていた。

すなわちIBM社のパンチカード・システムを保守することによって、機械製造の技術を取得し、あわよくば模倣しようとしたのである。鐘淵紡績、神戸製鋼所と同様、大本営の要請があったのであろう。にしても、同社において計算機への関心は、すでに戦前に始まっていた。

日本ワットソンの社員たちはどうしたであろうか。

水品浩は日本ワットソンが「敵産管理法」で資産を凍結されると同時に、横浜の山手警察署に逮捕された。書類上

機は鐘淵実業や陸軍の工廠や暗号解読部門のほか九州帝国大学などに納入された。しかし一九四五年の春、米B-29の空襲で設計図なども完全に焼失した。

四

安藤馨の配下にいた今村栄喜は、戦時中も一貫して立川飛行機に設置された統計会計機をサポートしていた。徴兵されずに済んだのは、パンチャー、サービスインジニアとしての仕事が「お国へのご奉仕」と理解されたためだった。終戦後、北川に誘われて連合国軍総司令部の情報処理業務に従事することになる。

島村浩は明治学院大学英文科を卒業して、日本ワットソン統計会計機械の設立と同時に入社した。ところが一九三八年に召集され、二年間の初年兵教育を受けたのち、一九四一年九月から四三年一月まで、戦車旅団の中隊長として台湾―マレー半島―シンガポールを転戦した。

関東軍に配属されていたら彼の戦後はなかったに違いない。

四三年に兵役を解かれ、向かったのは神戸だった。鐘淵紡績の兵庫工場で統計機の国産化に取り組んでいた北川宗助、安藤馨と合流し、並行して神戸商科大学で講師を務め

た。

前川良博は一九四二年に陸軍に召集され、平壤の高射砲隊に編入されたあと、釜山を経てラバウル、ブーゲンビルを転戦した。

ブーゲンビル島はガダルカナル島と並ぶ戦略の要地だったが、最後は撃ち返す砲弾もないままアメリカオーストラリア連合軍に一方的に攻めたてられ、アメルバ赤痢とマラリアに侵されながら一時は玉砕も覚悟したという。

四六年、無事帰国。

モリス・シユバリエは一九四〇年に日本を離れ、IBM社を退社してイギリスに渡り、次いでヨーロッパに渡って母国ベルギーをナチス軍から解放すべく、ベルギー自由軍に身を投じた。対ナチ・ゲリラ戦線で指導的役割を果たし、戦後になって再び来日したときの肩書きは「連合国軍ベルギー代表」だった。親日家として戦後日本の復興に尽力した。

日本ワットソンでカスタマー・サービスマンを統括したチャールズ・デッカーは四一年にアメリカに戻り、アメリカ陸軍のMRU（マシン・レコード・ユニット）に配属された。パンチカード・システムの操作と保守を任せられ、終戦の時はフィリピンのマニラにいた。のち戦略爆撃調査団を経て日本IBM初代社長となった。

日本ワットソン統計会計機械のフィールドサービス業務を継承した稲垣早苗は、軍服に似せたカーキ色の国民服を着て、東奔西走してIBM統計会計機械装置の保守に当たっていた。

皆機械の保全には苦勞したわけです。僕らは長崎に行ったり名古屋へ行ったり、重工業めぐりをして歩いた。部品が摩滅すると、部品そのものをもって行つて、東芝の技術屋さんが似て非なるものを作つて供給してくれた。

稲垣らの奔走で戦争中も計算機はそこそこに動いていた。

補注

山下奉文 やました・ともゆき／1885～1946。太平洋戦争で第二十五方面軍司令官としてマレー上陸作戦を指揮して成功させ、連合軍から「マレーの虎」の異名で畏れられた。四三年、大将に昇進し、四四年から第十四方面軍司令官としてフィリピンに駐屯した。四五年春、連合軍に投降し、翌四六年二月二十三日、「マニラ大虐殺」の罪で絞首刑に処せられた。

メッサーシュミット社 もとはバイエルン航空機製造という小さな航空機メーカーだったが、開発・設計技師だったヴェイリ・メッサーシュミットが経営権を取得し、先行するユンカーズ社やフォッケウルフ社などにはない軽量・全金属機体による航続性能、折りたたみ脚採用による高速飛行、大口径機銃装備による攻撃力などでナチス・ドイツ軍の主力戦闘機を受注した。世界初のジェット機を開発したことで知られる。第二次大戦後は五〇ccエンジンを搭載した三輪車やオートバイなどを生産した。

戦闘機「Bf109」 スペイン内戦のコンドル部隊に三機が試験的に投入された。第二次世界大戦終了までドイツ空軍の主力戦闘機として三万五千機が生産された。イギリス空軍のスピットファイア（スーパーマリン社製）、ハリケーン（ホーカー・エアクラフト社製）、アメリカ空軍のF4Fワイルドキャット、F6Fヘルキャット（グラマン社製）とライバル関係にあった。

戦闘機「Me262」 世界初の実戦配備および実戦を行ったジェット機。戦闘機の愛称は「シユヴァルペ」（ツバメ）、戦闘爆撃機は「シユトゥルムフォーゲル」（ミズナキドリ）だった。高高度

の水平飛行で最高時速八百七十キロ、急降下速度九百五十キロの記録がある。一千四百三十機が生産された。

暗号装置 ナチス・ドイツが開発した暗号「フィッシュ」と暗号装置「エニグマ」は連合国軍を大いに悩ませた。この暗号を解読する目的で行われた技術開発が電子計算機の基礎を作ったとされる。

超弩級戦艦 「弩」は石弓の意。超弩級は「特別に大きい」という意味で使われ、「ドアホ」「ド根性」など強調の接頭詞にもなっている。しかし本来は一九一六年就役のイギリス海軍の大型戦艦「ドレイトン」（二万七千五百トン、二十インチ砲十二門装備、速度毎時二十一ノット）を指す。各国が「ドレイトン号を超える大型戦艦」を目指したが日本は建造計画を修正できず「準下級」戦艦しか建造できなかった。「ドレイトン」に「弩」の文字を当てたために本来の意味が分からなくなった。

日本帝国海軍における計算機の利用 戦艦「大和」「武蔵」、航空母艦「大鵬」などの設計と建造には大量の鉄鋼材が必要だった。そこで統計会計機械装置を使わざるを得なかった。また艦船の砲台にはヘンミ計算尺を改良した専用の電動計算機が常備され、航行しながら波高や風向、風速などを勘案した砲弾の打ち出し角度の計算が行われた。

モリムラ・ブラザーズ・カンパニー 森村豊などが設立した「日の出商会」が発展して社名を変更した。一九四一年十二月八日、日米開戦と同時にアメリカ連邦政府により資産を凍結され事実上解散した。

西岡俊雄 にしおか・としお…東京芝浦電気の資材部長だった。矢野一郎 やの・いちろう／1899～1995。第一生命を創

業した矢野恒太（やの・つねた／1866～1951）の息子。

一九四七年第一生命社長となった。

弘世 現 ひろせ・げん／1904～1996。実父は三井合名会社理事の成瀬隆蔵（なるせ・りゅうぞう／1856～1942）。

日本生命第三代社長・弘世助太郎の娘婿となった。一九四四年、三井物産から日本生命に移って取締役、四七年専務、四八年社長となった。以後、三十五年間にわたって日本生命の社長を務めた。

洪澤智雄 しづさわ・ともお／1901～1947。渋沢栄一嫡流の孫で日本ワットソン統計会計機械の取締役だった。本業は澁澤倉庫常務だった。

森村義行 もりむら・よしゆき／1896～1970。松方正義（第六代内閣総理大臣）の十一男として生まれ、一九二一年京都帝国大学を出た。同年、森村開作（七代目市左衛門）の娘・松と結婚して森村姓となった。

岩村通世 いわむら・みちよ／1883～1965。東京に生まれ一九一〇年東京帝国大学法学部を出て司法省に入った。三四年東京地裁検事正となり帝人事件、天皇機関説事件の捜査を指揮した。刑事局長、司法省次官、検事総長を経て四一年第三次近衛内閣、東条内閣で法相を。第二次大戦後A級戦犯、四八年釈放され日本調停協会連合会理事となった。

津田信吾 つだ・しんご／1881～1948。愛知県に生まれ慶應義塾大学を出て鐘淵紡績に入社した。一九一〇年西大寺工場長、一六年淀川工場長を経て二九年取締役、三〇年副社長、社長。

三八年鐘淵実業を興して重工業や航空機製造、機械製造など軍需産業に進出した。第二次大戦後、戦犯として拘留されたが脳溢血で倒れた。

チャールス・デッカー Charles M. Decker：第二次大戦前、日本ワットソン統計会計機械にエンジニアとして派遣され、サービス部門の責任者を務めた。日本人女性と結婚し日本語も達者だったが太平洋戦争とともにアメリカに帰国、のちアメリカ陸軍太平洋戦線の情報処理部門に勤務した。連合国軍総司令部（GHQ）戦略爆撃調査団の一員として東京に駐在し、五一年「日本インターナショナル・ビジネス・マシンス」設立と同時に社長となった。

稲垣早苗 いながき・さなえ／1910～1999。一九四三年十月、日本統計機に入った。東京芝浦電気から移籍したとする説と、知人の紹介で日本統計機に入社したとする説がある。一九五〇年、営業活動を再開した日本IBMに入って営業課長、五六年取締役、六〇年常務、副社長を経て六二年社長となった。

日本IT書紀 055 敵産なれど

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。